

幅(第一圖及び第二圖)は瀟湘八景圖の殘缺、即ち遠寺晚鐘圖及び洞庭秋月圖らしく思はれるから、尊海渡海日記屏風のそれと相對して多少の興味があらう。總督府博物館の傳安堅筆赤壁圖(第三圖)は三尺幅の大幅の一部分であるが、山水の部分は絹素の斷爛や、甚しくて、圖樣分明ならず、且つ此圖を茲に掲げる所以は如拙瓢鮎圖の人物と此圖に於ける櫓を取る人物とを比照して頂きたい意味に於てであるから、旁々部分圖のみを載せることとした。總督府博物館の梁彭孫筆山水圖(第四圖)は關野貞博士の逸早く指摘せられた加く、渡海日記屏風の八景圖と樣式に於て相似る點多く、製作年代もほぼ相同じいので、同筆とまでは考へぬけれども、彼此對照してその頃の朝鮮畫の樣式の一斑を知ることを得ると思ふ。いづれ何もう次號に委曲を盡くすつもりであるが、例へば文清の秋月圖に於ても、梁彭孫の山水圖に於ても、また渡海日記屏風の漁村夕照圖(卷頭圖版第三圖向つて左)に於ても、申し合せたやうに山上に多くの人物が讌坐談笑に耽つて居る光景を見るなど面白いではないか。此種の圖樣は支那畫には殆ど見ることがなく、朝鮮系山水畫の傳統的一要素と言つて可からう。この意味においてまた聊か餘興ながら墨齋(畫僧、一休和尚の法嗣)の虎丘月明圖(第五圖)をも載せることとした。

なほ本論はしがきの中に朝鮮畫説の少いことを言つたが、一層細かに調べたらば外にも一二は見當るかも知れない。漢和畫師集と題する未刊の寫本に相阿彌の畫を評して「いづれにてもあいしらひはかうらゐのごとくにて、はん木のきのしたゑのごとし、ちとこしやくなるところあるべし」とあるなども見遁し難い。いづれにしても誰々の畫に朝鮮畫の風があるといふに止まり、日本水墨畫の本流と朝鮮畫との關係に至つては今も昔も考へて居ないのである。

圭籌渡海に就ては善隣國寶記を参照せられたい。

日本水墨畫壇に及ぼせる朝鮮畫の影響

#### 補 正 二 件

拙稿「高然暉に就て」の中に宜竹周麟の翰林胡蘆集から「題畫」の一篇を引き、しかも文中言ふ所の俊公天鷹の傳を得ないので其儘に打ちすてゝ置いたが、その後皇朝名畫拾彙に「天鷹俊首座、嘗寫佛心大光禪師像、請贊宜竹和尚、見其集、大光禪師則久庵諱、天鷹其法孫也」とあるを知り、また蔭涼軒日錄延德元年十月十一日の條に「今晨鷹俊仲、持畫扇杉原來」、同二年九月廿九日の條に「丑刻鷹俊仲逝去」、同十月十八日の條に「往半陶齋、問彦龍不例、且弔鷹俊仲逝去」の數節を發見したから、不取敢これを報じて置く。第十三號一行目参照

又、善阿彌論善阿年齡の所では如何にしけむ、年表を見誤りて元中三年丙寅を乙丑としたので、由々しき錯誤に陥つた。しかしそれにしても元中三年寅歲から數へて長亨三年は百四年目に當るから、鹿苑日錄の長亨三年九十七歲説は何かの誤であるに相違ない。兎に角善阿年齡の計算に就て又しても我ながら我を疑ふばかりの錯誤に陥つたわけで、慚愧に堪へない。第廿六號二八頁上九行乃至十六行参照 (脇本)